



TITLE:

学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の 取り組み 2007年度

AUTHOR(S):

徳永, 俊太

CITATION:

徳永, 俊太. 学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2007年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書 (2007-2011年度): 30-31

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179746>

RIGHT:

京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2007年度

1. 京都市立高倉小学校との連携

教育方法学講座教育方法分野（以下、教育方法研究室と記す）では、「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」を合い言葉に、2003年度から京都市立高倉小学校との共同研究、通称「プロジェクトTK」に取り組んでいる。この合い言葉は、「子どもが育つ」という目標に向かって、先生と院生が協働して取り組み、その中でお互いに実感した自身の成長を言葉に表したものである。プロジェクトTKは2007年度で五年目を迎え、教育方法研究室の共同研究の中でも重要な位置を占めている。

プロジェクトTKは、教員ではなく教育方法研究室の院生が主導で行っているプロジェクトである。共同研究の方向性や学校との関わり方も院生集団に決定権がある。院生が主体となった小学校との共同研究は、全国的にも珍しいのではないだろうか。



▶教育方法研究員のメンバー

プロジェクトTKのもう一つの特徴は、教育方法研究室も高倉小学校も、組織に所属する全ての人が共同研究に関わっていることである。私たちはこれを「面と面との付き合い」と呼んでいる。

2. 院生の活動

高倉小学校での院生の活動には、二つの柱がある。一つ目は、授業観察である。院生は日常的に教室に入り、各自でノートを取りながら授業を観察する。「授業は先生のもの」という立場から、院生が授業の補助をしたりすることはない。あくまでも観察することに徹している。授業を見せて頂いた後には、先生に対して何らかの形でフィードバックを行っている。休み時間の前の授業であればその場で話すこともあれば、感想等を書いて先生にお渡しすることもある。先生だけではなく、教育方法研究室の院生に対しても、いつ・どの授業を行ったのかを授業の感想を添えて報告する

ようにしている。また小学校の研究授業や研究発表会に際しては、先生の許可をいただいた上でビデオやカメラを用いてデジタルな記録を残したり、詳細な授業記録を起こしたりするなどして、様々な形で記録を蓄積することにもつとめている。蓄積された記録は、院生内で定めた情報共有ルールの乗っ取り、プライバシーを配慮した上で高倉小学校との共同研究に活用している。



▶授業観察の様子

二つ目の柱が授業づくりへの参加である。この活動は、高倉小学校の研究単位であるリテラシー部会（2005年度までは教科部会）に院生が参加することで行われている。

院生は先生方の指導案を見せていただき、目標や単元構成、手立てなどについて、一緒に検討を行っている。先生の要請に答える形で理論研究の知見や資料を提供したり、普段の授業観察から子どもの様子について議論したりもしている。指導案検討に参加することによって先生と課題や授業のねらいを共有し、その解決や達成に共同して取り組んでいる。私たちはこのような自分たちの関わり方を「伴走者」としての関わり方と呼んでいる。

先生方と課題や授業のねらいを共有することは、授業観察にとっても重要な意味を持っている。授業を観察する際の視点を先生と共有し、授業で注目すべきポイントが自ずと定まってくるからである。

授業が終わると、リテラシー部では事後検討会を開かれる。議論の焦点は、指導案検討をする際に出てきた課題や授業のねらいと子どもたちの学習の様子である。先生が授業で試みられた手立てや授業の様子を言語化して残し、先生方と共有することも行っている。授業の様子を文章化したものは、「院生さんの目」という形で、高倉小学校の研究紀要に掲載されている。

このような授業観察と授業づくりへの参加は、研究授業と研究発表会の単元を中心に行われている。指導案検討を通して単元のねらいを知り、授業観察を通し

て先生と単元の授業の様子を共有し、事後検討会で単元の狙いを先生と検討する。高倉小学校での院生の活動は、単元づくりへの参加と言い換えることができる。

3. 2007年度の取り組み

単元づくりへの参加は、2003年度に院生を理科班・社会科班・育成班の三つの班に分けて始まった。2003年度前期は高倉小学校の全ての教科部会に参加することができなかったが、2003年度後期に国語班（2006年度から読解班）が、2004年度に算数班が、2006年度に英語班が結成され、高倉の先生全員と教育方法研究室的院生全員が関わる体制が出来上がった。2007年度は院生の数がやや減ったこともあり、算数班・理科班・英語班・育成班の四つの班で活動している。各班とリテラシー部との関わりは、各般の班長とリテラシー部の先生との話し合いで決定されている。

2007年度はリテラシー部会での教科の課題に沿った共同研究に加えて、教科を超えた研究テーマにも取り組んでいる。院生は今年から高倉小学校に新設された学力向上会議に参加し、さまざまな教科の先生とグループ学習についての研究を行っている。

まず研究の方向性を決めていくために、具体的な授業の様子を手掛かりに、グループ学習とイメージについて、先生と院生で意見の交換を行った。



▶事後検討会の様子



▶ワークショップの様子

その結果分かったことは、教科によってイメージされているグループ学習像やグループ学習を用いるタイミングが異なっているということである。そこで、これまでのリテラシー部との共同研究の蓄積を活かし、教科の課題を深めていけるようなグループ学習はどのようなものなのかを探ることにした。研究テーマも、「良いグループ学習とは何か」から「クラスの学びを深めるグループ学習はどのようなものか」というように変更した。

現在は、リテラシー部との共同研究の中で各リテラシー部のあるべきグループ学習の姿を追究し、それを学力向上会議で他のリテラシー部の先生方と共有することで、グループ学習の研究を進めている。

4. おわりに

プロジェクトTKの成果は、院生が科研報告書にまとめたり、学会で発表を行ったりすることで公表を行っている。それらに対しては、これまで高い評価をいただいている。また2007年度は、高倉小学校が第23回時事通信社「教育奨励賞」努力賞を受賞し、内外教育第5772号の「院生と連携し、教師の授業力向上」という記事で、院生との連携が取り上げられた。

しかし、2007年度でプロジェクトTKも五年目を迎え、立ち上げに関わった高倉小学校の先生も教育方法研究室的院生も少なくなってきた。これまでの研究の蓄積や研究の進め方のノウハウを研究室内でどのように伝えていくかが今後の課題といえる。

(文責：徳永 俊太)